

A hero and traitor

木苺パン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「私は貴方を救うためなら、この世界なんてどうだっていい」

英国最大にして唯一の魔法学校― hogwarts 魔法魔術学校。

数々の優秀な若人が今年もこの門をくぐる中、聖28由緒正しい血筋の少年― いわゆるボンボンが入学した。

彼に待ち受ける試練。新たな友人。

物語とだいぶ違う物語。

皆大好きフォイが主人公。原作よりヘタレ度強めのフォイをよろしくお願いします。

目次

一話	コンパートメントにて	1
二話	最悪	10
三話	魔法薬学	16
四話	My father!!	24
五話	飛行訓練、そして決闘	28
六話	逃走	39
七話	弱虫ヒーロー	44

一話 コンパートメントにて

純血。

それは魔法族だけで構成された清らかな血。

高貴なる我らがこの血こそが世界の至高にして正義そのもの。

それ以外の人間など塵芥に等しく、排斥しなければいけない穢れた存在。

僕らは蛆のような奴らと区別されなければならない。

尊い血こそが敬われるべきなのだ。

「グリフィンドール!!」

—だからこんなことは僕に限ってあつてはならない。

※

—話は数時間前に遡る。

僕は父上と母上との別れを惜しみ、『ホグワーツ行き特急11時発』に乗っていた。

特に母上の悲しみよりは凄いものだった。

ホグワーツなんて観光地にもならないような近場の学校だというのに、母上は目頭にハンカチをやって「家が恋しくなったらすぐに戻っていらつしやい」と言っていた。勿論、父上は厳しい方なのでそんなことは絶対に許されないし、僕ももう子供ではない。

やれやれ、子供扱いは卒業して欲しいものだ。

話は脱線したが僕はホグワーツ魔法魔術学校に向かっていた。

僕はいつもしているようにクラブとゴイルに席を取らせていた。まあ、すぐに後悔した。二人は車内販売の魔女から菓子類をおおよそ全種類買い、食い散らかして、コンパートメントは家畜小屋と化していた。

甘たるいにおいで酔いそうだったが僕は我慢——というか失望して車窓の眺めを楽しむことにした。

半時間も経たないうちに二人は食べ終わったから順番にチェスの相手をさせた。

前にも何回かゲームの説明をしたはずだがクラブもゴイルも見

事に忘れていたので、僕は非常に面倒ながらも、もう一度説明した。理解しているかはさておき。

「なあ知ってるか？この特急のどっかにハリー・ポッターがいるらしいぜ」

「嘘！あの『生き残った男の子』が？」

僕らのコンパートメントの外からそんな噂が聞こえた。

ハリー・ポッター。

11年前の『例のあの人』の襲撃から生き延び、あろうことが『例のあの人』を

破滅に導いた奇跡の英雄。

しかし、本人はそのことを知らずにとマグルと生活を共にしていたらしい。笑劇より愚かな悲劇といえよう。

「おい！クラブ、ゴイル！ハリー・ポッターのところに行くぞ！」
うんうんと寝言のごとくチェス盤を前にして唸る二人の目は言わずとも、「何故？」と聞いていた。

「決まってるだろう？魔法族のルールつてやつを教えてやるのさ！」
僕は居ても立っても居られなくなり、コンパートメントを飛び出した。そして一つ一つのコンパートメントを覗いては首を横に振った。最後尾の車両の一室にハリー・ポッターらしき人物をようやく見つけたて、僕はノックした。

「ほんとかい？このコンパートメントにハリー・ポッターがいるって、汽車の中じゃその話題でもちきりなんだけど。それじゃ君なのかな？」

確固たる自信がありながら、僕はハリー・ポッターに尋ねてみる。
「そうだよ」

「僕はドラコ・マルフォイ。で、こっちの二人はクラブとゴイルだ」
僕の名前を聞いてからクスクス笑う失礼な奴がいた。

赤毛にそばかす。

—ウイーズリーだ。

この家は確かに純血のはずだが、マグルを優遇する馬鹿な一族だということとは前々から父上が仰っていた。曰く、「こいつらとは関わる

な」。

しかし大家族であるが故、教育が行き届いてないのは仕方ないのかもしれない。何でも子供一人のローブを買うのに苦労している位なのだから。そう思うと、怒りは落ち着きやがて憐みに変わった。

「僕の名前が変だというのかい？君こそ、その汚い服をどうにかした方がいいんじゃないのか？」

「グリフィンボールに十点減点！」

「わっ！……驚かせるな！それとノックもせずに入ってくるな！」

「それは失礼したわね。開けっ放しだったから」

後ろを振り向くと女生徒がドアに寄りかかって立っていた。

腰までのばされた金髪は同じ僕のコピーでは似て非なるものだ。僕が月の色をしているのなら、この女生徒は太陽の色だろう。そして空のように碧い瞳。一見すると美貌の少女だ。

どこかで見たことがあるような……。思い出せない。

「思い出せない？ならいいわ。私、ダフネ・グリーングラスよ」

—ああ思い出した。

貴族のパーティーで何回か見かけた。彼女は名家・グリーングラスの長女だ。といっても彼女の印象はパーキンソンの取り巻きといったところだ。あまり話したことはないし、急に「グリフィンボールに十点減点！」なんて言われる筋合いはない。

「えーと……。二人は知り合い？」

状況が読み込めないハリー・ポッターは僕に尋ねる。けど今それはどうでもいい。

「そんなところだ。ポッター君。そのうち家柄のいい魔法族とそうではないのと分かってくるよ。そのへんは僕が教えてあげよう」

僕はチラリとウィーズリーを見やると、奴は僕と目を合わすまいとそっぽをむいた。

「間違ったのかどうかを見分けるのは自分でもできるよ。どうもご親切様。」

それを感じ取ったのか、ハリー・ポッターは侮蔑するような視線を僕に送った。

屈辱だ。

このドラコ・マルフォイに限ってありえない屈辱だ。それも今まで経験したことがないほどの屈辱だ。

感じる視線はこんなにも冷ややかだというのに僕の体はまるで溶岩のように熱くなる。

「礼儀をわきまえないと君の両親と同じ道をたどることになるぞ、ハリー・ポッター」

僕はその溶岩を吐き出すかのように喋った。

「特にウィーズリーみたいなのと友達なんかになつたりするとね」

「もう一辺言ってみろ！痛い目に合わせてやるぞ」

ウィーズリーはポッターを庇うように前に出た。しかし、ウィーズリーが僕に勝てるとは思えない。どう見ても二人の体形は貧弱そのもの。きつとろくなものを食べてこれなかったに違いない。

「へえ、殊勝なものだね。僕と喧嘩するつもりなんて」

その時、だんまりだったグリーングラスが僕達の間割って入った。

「―そこまでよ」

「何だよ。女の君には関係ないよ」

ウィーズリーはむつつりと明らかに不機嫌そうだった。それに対しグリーングラスは先ほどのポッターとウィーズリーよりも冷ややかに言い返した。

「そうね。関係ないわ。興味だつてないわ」

「だつたらー！」

「私、嫌よ。こんなところで喧嘩して本当に減点されたりするの。冗談じゃないわよ、入学前に私達の寮が減点されるなんて」

ポッターとウィーズリーは妙に納得した面持ちになった。

「それじゃあ失礼するわ。またホグワーツで会いましょう。ホラ、行くわよ。マルフォイとその他大勢」

ここで引き下がりがりたくなかったが、グリーングラスが言うことも一理ある。この女と退散するのは不本意だったけれどそうすることにしました。

クラブとゴイルは「その他大勢」という言葉について思案を巡らしているようだった。

僕はポッターとの屈辱的な出来事を紛らわすようにグリーングラスにたずねた。

「グリーングラス。君はもうコンパートメントはとつてあるの?」

彼女はケラケラ笑う。

「私がずっと突っ立てるだけかと思った?」

クラブとゴイルは「そうじゃないのか?」と目を合わせてひそひそ話をしていた。二人の手の中にはかぼちやパイがある。どうやらポッターから（ウィーズリーはありえない。経済状況的に）こっそり頂戴したもののようだ。

「馬鹿ね。あるわよ、ただしミス・パーキンソンとミス・ブルストロードがいるけど」

僕はただ「そうか」と答えた。別にあの二人組のところに行ってもいいのだが、何分女子の癖にブルストロードの体は大きい。そして僕の仲間の図体もやたら大きいので入ったら窮屈になりそうだ。

「行ったら喜ぶわ。……主にミス・パーキンソンがね」

パーキンソンが僕に好意を抱いているのはずいぶんと前から知っている。じゃあ僕がパーキンソンを恋愛対象として見ているかと聞かれたら見てはいないが、それでも誰かに好かれることは気分がいい。思わず頬が緩む。

「ああ知ってるさ。でもどうせホグワーツで会えるで会えるだろう?」

「だから今は、」

僕はニヤリと笑った。

「君と話がしたい」

少しキザっぽかっただろうか?

でも実際にモテているんだから。

こんな経緯があり、僕のコンパートメントにダフネ・グリーングラスを招いた。

——この時の僕はまだ知らない。僕が地獄に招かれたことを。入った途端にグリーングラスは小さく悲鳴を上げた。僕はすっかり忘れ

ていたが、この部屋はどこぞの二人によって汚されていた。……誰とは言わない。

グリーングラスは杖を取り出すと呪文を唱えた。すると、ごみはたちまち一掃されて清潔に戻った。

悔しいが僕はまだ使ったことがない呪文だったので彼女を密かに尊敬し、同時に教科書を読み直すことを決心した。

「優秀なんだな」

「綺麗好きなだけよ」

彼女は褒められたからといって、鼻を高くするそぶりは見せなかった。

グリーングラスは僕の隣に座った。というのもクラブとゴイルはとにかく横に大きいのでこう座る他なかった。

「ところで君は入寮は決めたの？」

寮とはその名の通り、ホグワーツ魔法魔術学校の在学時に所属する四つの寮のことだ。グリフィンドール、ハッフルパフ、レイブンクロー、そしてスリザリン。それぞれ創設者の名にあやかり、シンボルや特色の何から何まで異なっている。『ホグワーツの歴史』によれば、「組み分け帽子」が生徒にとって最良の寮を決めるらしい。

「貴方って面白いこと言うのね」

グリーングラスの反応は予想を裏切った。

「寮は決めるものじゃないわ。選ぶものよ」

「ともかくどこだと聞いているんだ」

グリーングラスは僕を小馬鹿にしたように笑ったまま、「そういう貴方達はどうなの？」

「もちろんスリザリンだ」

クラブとゴイルは静かに頷いた。二人も聖28でないにしろ、何代にもわたる純血だ。当然僕と同じ寮に決まっている。

「スリザリンは選ばれし人間が入ることが許される寮だ。僕らみたいな純粋な魔法族のね」

グリーングラスは髪の毛先を指で弄って「ふうん」とさも興味なさげに言った。

「で？僕は言ったぞ。君はどこがいいんだ？」

「グリフィンドールよ」

「―は？正気か？」

平然と言い放った驚愕の一言に開いた口が塞がらない。ゴイルは噛んでいた百味ビーンズを口から落とした。

「本気なのか？」

「本気じゃなかったら何だと言うの？」

グリーングラスはきちんと揃えていた足を組んだのでスカートから白い太ももが露わとなる。健全な青少年にとってはかなりきわどい体勢になった。クラブとゴイルは彼女の顔と足を交互に見続けたし、さすがの僕も赤面せずにはいられなかった。

「私達がスリザリンに固まってもしょうがないでしょう？純血だからこそ『穢れた血』とか『血を裏切る者』に私達の力を徹底的に叩き込ませてあげるの。あの塵芥にも満たない下等生物の教育には絶好の機会だと思わない？」

さつきまで茶化すことばかりしていた彼女は、まるで牙をむいた獣のような表情に変わる。それからふふふと可笑しそうに笑う。

―この女は悪魔だ。

「なんてね。冗談よ。でも自分にとってどれが最善の察なのかは考えておくことね」

タイミングよく車内アナウンスが流れる。

「ではご機嫌よう。貴方達も着替えた方がいいわよ。」

グリーングラスは颯爽と立ち上がり、呆然とする僕らを残していった。

―そしてコンパートメントを去る前に振り返って微笑みかけた。

「また会いましょう、できればグリフィンドールでね」

※

生徒は Hogwarts に到着し、新入生である僕らもいよいよ組み分けの儀式の時間となった。今回の組み分けはいずれ本にも載るような世紀の儀式となる。僕を屈辱の底へと陥れたあの忌々しきハリ―ポッターがいるのだから。

しかし僕が気にかかっているのはグリーングラスが残した謎の言葉。暗示。

僕の彼女のイメージ——といいつつ、本人からいわれなきや思い出せないくらいなので、頼りないものだが、ダフネ・グリーングラスは花と読書と紅茶を愛でる深窓の令嬢といった風だ。パーキンソンやブルストロードと行動を共にしながら、いつも一歩引いたところに佇む貝のように内気な女子。

そんな彼女があればほど挑戦的かつ暴力的な思想を持ち合わせていると誰が考えるだろうか？ いや、大人しいからこそ腹の内ではあんなことを考えているのかもしれない。もしかしたら普段からそうであって、単純に僕が気づかなかっただけかもしれない。

よく……分らない奴だ。

そもそもグリフィンドールを選ぶことが冗談なのか、あの加虐的な言葉のどちらが冗談なのか。聞くべきかもしれないが、他の一年生に紛れて生憎彼女がどこにいるか知らない。

「アボット・ハンナー！」

最初の生徒が呼ばれた。アボット……聖28の一族だ。でもあの家は……。

「ハツフルパフ！」

落ちこぼれの穴熊寮だ。

グリーングラスはやはりグリフィンドールを選ぶのだろうか。勿論、血筋を鑑みればスリザリンドだ。

——では僕は？僕はスリザリンドだ。だって僕は、僕の家は何代も前からスリザリンドだ。

「グリーングラス・ダフネ！」

もう彼女の番か。組み分け帽子は金の頭に乗し、しばらく居座った。

やがて——「グリフィンドール！」

ボロ帽子が叫んだ。グリーングラスのローブの裏地は深紅に輝き、揺らめいた。

純血主義の家柄というのは周知のことだ、彼女を快く迎える人間は

ゼロに等しい。それでも彼女はレッドカーペットの上の女優さながらの足取りでグリフィンドールのテーブルに向かい、着席する。

これで証明されたが、冗談はあの血生臭い発言の方だ。

次々に生徒が呼ばれ、寮が決まっていくな。

僕にとって「最善」の寮？決まりきったことだ。

二話 最悪

読者諸君、もうお分かりかもしれないが、僕にとって最善の寮がこのザマだ。

「……意味が分からない」

僕の頭にはまだ悪夢みたいな叫びが反響している。

「何をしているのです？ 後ろが詰まっていますよ、早くグリフィンドールのテーブルに行きなさい」

「はあ……。すみません……」

不覚にも僕はグリフィンドールの寮監に謝ってしまった。僕としたことが！

仕方ないので僕はグリフィンドールのテーブルに向かうが拍手して歓迎する者はまばらだ、見事にほとんどいない。回りからの氷柱のような視線がグサグサ刺さる。

—あのマルフォイがグリフィンドール？

—純血主義者がグリフィンドールなんてありえない！

おい、全部聞こえてるぞ！

僕だって意味が分からない、というか僕が一番ありえないと思っている。視界の端には驚いた顔のクラップ、ゴイル、パーキンソン、そしてその他大勢……。

重い足を鈍器のように引きずってようやく着席すると、凶ったかのように目の前にグリーングラス。彼女も僕に死の祝福（拍手）を贈った一人だ

「ご機嫌いかが、ミスター・マルフォイ？」

「見りや分かるだろ」

口から鉛を吐き出すようなため息をつく。

「よかったわ、貴方もグリフィンドールで。大丈夫よ。私の時も大概そんな反応だったから」

「僕と君じゃあ訳が違うだろ……」

グリーングラスがグリフィンドールに選ばれた時、確かに周りは困惑していた。でもグリーングラス家は純血主義いえども僕の家ほど

声高に宣言してはいない。

そうこうしているうちに、組み分けは進められる。やがてポッターの組み分けが終わり、僕の周りは耳障りな拍手が響いた。

おい、やめろポッター。何で僕の隣に座ろうとするんだ。

「何でここにいるんだ？」

ポッターは着席するやいなや僕にたずねる。

「それは僕が聞きたいくらいだ」

「私知ってるわ。マルフォイ家は中世フランスから生まれた純血主義の貴族で代々スリザリンなのよ。皆に驚かれても当然だわ」

グリーングラスの隣で栗色の縮れ毛の女がまくしたてるように言った。

「元々貴方のご両親は『例のあの人』の仲間だったって本当？」

「知らない！僕はそんなこと知らない！だいたいそれは随分前に決着がついた話だ！父上は悪い奴に呪いをかけられてただけだ！」

「ごめんなさい。そんなつもりじゃなかったのよ」

縮れ毛は悪びれずに謝った。初対面の人間に魔法界を陥れた『例のあの人』の話をするなんて言語道断だ。それも僕の家のおかげからぬ噂なんて。

「ミスター・マルフォイ許してあげて。そういう事情に詳しくないのよ」

「ああそうか！詳しくなかったならさげすけと悪い噂を本人にきいていいの？」

その時、グリーングラスは僕に耳打ちした。

—彼女はマグル生まれなのよ。

納得した。これだから穢れた血は嫌いなんだ。

「……あの、ごめんなさい。私はハーマイオニー・グレンジャー。これから仲良く出来たら嬉しいわ」

穢れた血のグレンジャーは僕に握手を求めたが無視をした。握手をしたらそれこそ僕の手が穢れる。

ひどく傷ついた顔のグレンジャーを見て隣に小突かれた。

「……ドラコ・マルフォイだ」

仲良くする気は毛頭ない。

※

組み分けは滞りなく進み、ようやく僕達は夕食にありつける。

ちなみにウィーズリーもグリフィンドールだ。僕の希望としては牢獄・アズカバンにでも組み分けされて欲しいところだったが。

そもそもこんなのおかしい。

一体全体、僕が何をしたというのだ。

僕がグリフィンドールに組み分けされるなんて、それこそシリウス・ブラックがアズカバンから脱獄してくるの以上にあるにない状況だ。

よくよく考えたら、僕の隣でステーキを呑気に食べる奴が変なことを吹き込んだのが原因だ。僕も恨みがましくステーキを一口食べる。……美味しい。

「おやおや、食事の最中にしかめっ面はよくありませんよ。こんなに美味しいものが食べられるというのに」

顔を上げるとそこにはゴーストがいた。しかも首が取れかかった。

「ぎゃー！ゴーストが急に話しかけるな！マナーだろ！」

「うるさいわよ。ご機嫌よう、サー・ニコラス」

「また会いましたね、グリーンングラス嬢」

グリーンングラスはにかんだ。

「グリフィンドールの新入生諸君、今年こそ寮対抗の優勝カップを獲得できるよう頑張ってくださいるでしょうな？この六年間スリザリンが寮杯を取っているのですぞ！『血みどろ男爵』が鼻持ちならない状態です……スリザリンのゴーストですがね」

僕はスリザリンのテーブルをふと見やると、パーキンソンの隣に虚ろな顔のゴーストが鎮座していた。服には銀色の血が付着し、大いに食欲をなくしてくれる。パーキンソンもげんなりといった感じだ。

—ああ、あそこの席でいいからスリザリンのテーブルにいれたらどうなんにいいだろう！

こんなに恥辱に満ちた思いはしないだろうし、肩身は狭くないだろう。

全員がデザートまで食べ終わったところで偉大なる校長―ダンブルドアが立ち上がった。

「エヘン―全員よく食べ、よく飲んだことじゃろうから、また一言、三言。新学期を迎えるにあたり、の諸注意じゃ。構内にある森には入ってはならぬ。上級生はよく分かつているはずじゃ」

ダンブルドアはウィーズリーの双子に目をやる。

「管理人のフィルチさんから。授業の間に廊下で魔法を使わないこと。それと今学期の二週目にクディッチの予選がある。チームに参加したい者はマダム・フーチに申し出ることに」

ダンブルドアは向きを正すと「最後にもう一つ」と前置きする。

「今年いっぱい四階の右側の廊下に近づくとでないぞ。……とても痛い死に方をしたくなかったら話じゃが」

いつそのこと僕以外のグリフィンドル生がとても痛い死に方で死ねばいいのに。

※

その後の話は少し割愛させてもらおう。

僕は今どこにいるかって？

ホグワーツの廊下だ。しかも真夜中の。

僕のルームメイトは野蛮人で日付が変わりそうになるまで馬鹿騒ぎしていたのだ。僕は奴らが寝るまでずっとベッドに潜り、息をひそめていた。

今、どれほどの校則を犯しているのだろう。でもあと数時間でそんな悩みともおさらばだ。朝が来たら僕の寮はスリザリンド。オマケにグリフィンドルは僕のおかげで減点されてればいいのに。

僕は『ホグワーツの歴史』に記されてある通りに校長室に向かってる。

しばらく歩くと二対のガーゴイルが暗闇に浮かび、おもわず声が出そうになった。……危ない。ここでスクイブのフィルチに出くわしたら面倒だ。ここまで出会わなかったのも奇跡のようなものだ。

僕は扉をノックする。

「鍵はかかっておらんよ」

奥からダンブルドアの声がする。

「失礼します」

校長室は荘厳な造りだった。壁一面に巡らされた円形本棚と繊細な止まり木で眠る不死鳥——言うまでもなく圧倒された。まあ僕の家ほどではないけど。

「夜分遅くにすみません。ドラコ・マルフォイです」

ダンブルドアはブルーのパジャマとナイトキャップを被っている。僕を見てにこりと笑った。

「来ると思っていたよドラコ」

「なら話は早いですね」

「ほお？ 話とは？」

どうせそれも分かっている癖に、と僕は密かに毒づいた。

「僕の組み分けをやり直してください」

ダンブルドアは眉を下げて悲しそうな顔になった。僕はこの反応は想定済みだ。偉大な校長はグリフィン・ドール・轟肩で有名なのだから。

「それが……君の本心かね？」

「ご存知の通り僕の家は代々スリザリンです。……父上も母上も。僕にとつての最良の寮はスリザリンのみです」

「ドラコ、それは君の一族の先祖や両親の話じゃ。確かに君はマルフォイ家の一員じゃが、だからといって今までと同じとは限らん」

「で、でも僕も純血主義者で……」

「何故君は純血主義なんじゃ？」

考えたこともなかった。

「それは……」

言葉に詰まる。

だってそれが当たり前だった。

父上も母上も、うんと前の僕の先祖だって自分の血を信じてきた。だから僕もそうだ。

それに何の理由が必要だ？

自分達の血こそが至高だと信じること。

その何がいけないんだ？

—分からない。

「ドラコ。君は十分グリフィンドールでやっていける力は持っている。だから組み分け帽子は最終的に選んだのじゃよ」

必死に首を横に振る。

「僕にそんな力ないと思います」

「まだやってもいけないのにどうして分かる？」

僕はまたしても何も返せなかった。唇を噛んだ。

ダンブルドアは悔しそうな僕を諭すように「もしどうしても自分がやっていけないと思ったら」と言った。

「一年経ったらまたここに来なさい。その時は君の組み分けを考えようかのう」

全く、末恐ろしい「グソジジイ」だ。僕がここまで汚い言葉を乱用することなど今後一切ないことを願いたい。

「寝室まで付き添おうかの。勿論、フィルチには内密じゃよ」

ダンブルドアはグリフィンドールの太った婦人の肖像画の前まで送ってくれた。

僕は足早にベッドに潜る。

—今日は人生で一番疲れた日だ。

三話 魔法薬学

部屋に眩しい朝日がさしこみ、僕は目が覚める――

スリザリンカラーの深緑の天蓋ではなく、僕がまず目に入ったのはまぶさうことなき深紅。

……まるで血の海だ。

調度品の何から何に至るまで深紅と金、あるいはそれに合う色だ。つまり僕はまだグリフィン・ドールの生徒ということだ。どうりでよく眠れなかった訳だ。

他の奴らはまだ寝ている。げっ、こいつはベッドから落っこちてるぞ。

時計を見たらまだ朝食まで一時間もあつた。

……そうだ。母上に手紙を書く約束をしたんだつた。母上は僕の寮を知って何と言うだろう……悲しむかもしれない。父上は？ああ、お怒りになるに違いない。どうしよう。

とにかく手紙を書くために着替えて談話室に行く。なんせここでは書くにも書きにくい。

「おはようミスター・マルフォイ」

「起きていたのかグリーングラス。お前も家族への手紙か？」

「まあね。そんなところよ」

彼女はもう書き終わつたようで便箋に封をしていた。宛名は……アステリア。

「やだ、勝手に覗き込まないでくれる？」

「ああ、……すまない。このアステリアというのは君の母上かい？」

「いいえ、違うわ。私の妹よ。パーティーで貴方は見かけたことがあるはずだけど？」

グリーングラスは咎めるように問い詰めた。

「………忘れた」

グリーングラスは僕を見てため息をついて呆れる。

「レデイの名前を忘れるなんて貴方も随分薄情者ね。……まあ仕方ないかしら。アステリアの方も最近恥ずかしがり屋だもの」

グリーンングラスはローブのポケットに手紙をしまい込む。

「そういえば貴方、怒られたりしないの？純血主義のご両親に」

「だから怒られないように文面を考えてるんだ！君はどうなんだ？怒られないのか？」

「ラツキーなことにはうちは放任主義なのよ」

こういう時に限り他の家が羨ましい。そして妬ましい。特に気にした様子なく、嬉々として困る僕を眺める彼女はまさに悪魔の権化。

僕は昨日からの疲れと怒りが溜まり、キャパオーバーだった。

「何なんだよ君は！昨日から！一体全体！そもそも僕がここにいないきやいけない理由の半分は君みたいなものだ！」

激昂したにもかかわらず、彼女は余裕綽々だ。それがさらにむかついた。

「あらあら。そんなに怒っちゃって。言い訳なら昨日考えてあげたじゃない」

「―はあ!?どういう意味だ!」

彼女は僕に向かって微笑む。それも聖母のような残酷な笑み。

「そのまんまの意味よ」

それだけ残し、グリーンングラスは談話室を去った。

勿論、僕には意味が分からない。彼女の言葉も、彼女自身も。

※

なんとか手紙を書き終えたあの朝から数日が経つ。

恐ろしいことに父上と母上からの返事はない。

悩んだ末に、僕は事実だけを簡潔に書いた手紙をふくろうで送った。

ホグワーツの構造にも慣れ、授業も始まったが学校生活は僕が思っていたほど順調ではない。グリフィンドールの奴らは僕とまともに話そうとはしないし（こつちからも願いたい下げだ）それどころかお子様みたいな嫌がらせをする始末だ。当然三倍返しぐらいにはしてやるが。

何より辛いのは僕の仲間とつるめないことだ。本当の僕は、今の僕と反対側の席でグリフィンドールの連中のアホさ加減を笑ってやつ

たのに。

クラブもゴイルも、僕と目を合わせようとは絶対しない。反対にパーキンソンは前より鬱陶しくなった。「ダフネの仕業よ！」と息巻いている。あながち間違いではないと僕も睨んでいるが、正直、パーキンソンの慰めは僕の慰めにはならず、むしろ段々と自分が情けなく思えてくる。

―何で僕はここにいるんだ？

自問自答を千回。でも答えは誰も教えてくれない。

一年経てばグリフィンドールともおさらばだ。僕はそれを大人しく待つしかない。

そういえばグリーン格拉斯もかろうじて被害を受けているようで、毎日呪いの文書が届くそうだ。いい気味だ。

僕の最悪な学校生活はそんなところだ。

そして今日は初めて魔法薬学の授業がある日だ。

一応、ホグワーツに入る前までは一番楽しみにしていた授業だ。教授のスネイプ先生は父上の後輩だと聞いていたし、何より父上が先生をいたく気に入っているからだ。恐らくスネイプ先生は僕を御鼻屑なさると思っていたが、今は微妙だ。

何故かって？

僕がグリフィンドールだからだよ！

魔法薬学の授業は地下牢で行われる。しかもスリザリンと合同で。

「おい、グリーン格拉斯。僕と―」

ペアを組まないか、と聞こうとしたが、すでに相手を見つけているようだった。グリーングラスはスリザリンの一部女子に恨みを買われつつもグリフィンドールではそこそこ上手くやっているらしく、僕の知らない女子と一緒に席に着いている。

僕はグリーングラスを呪う方法を調べるために図書室に行くことを誓っていると、ローブがぐい、と引っ張られた。

「ドラコ。私と一緒に座りましょ」

正体はパーキンソンだ。相変わらず空気の読めない奴だと思い、僕はイラつきながら言った。

「パーキンソン。悪いが他をあたれ」

「だって私も余っているんだもの」

僕は周りを見渡したが、確かに余りは僕とパーキンソンだけだった。意外と策士なんだなと感心しつつ舌打ちする。本当は絶対に相容れない二寮が隣だなんて目立ってしようがない。その証拠にポッターとウィーズリーはこつちを見てニヤニヤ下卑た笑いをしている。スネイプ先生が教室に入ると、グリーングラスの悪口を並べ立てたパーキンソンも押し黙った。僕も自然と背筋が伸びる。

黒衣の魔法薬学教授・セブルス・スネイプー。

それは本当だった。油っぽい髪の毛と土気色の肌はお世辞にもあまり清潔には見えなかったが、出席の途中で「ハリー・ポッター。我らが新しい―スターだね」と皮肉ったので僕は大層好感が持てた。

「このクラスでは魔法薬調剤の微妙な科学と、厳密な芸術を学ぶ」

変身術のマクゴナガルと同じで何もせずとも生徒は静かに話を聞いている。

「このクラスでは杖を振り回すようなバカげたことはやらん。そこで、これでも魔法かと思う諸君が多いかもしれん。フツフツと沸く大釜、ユラユラと立ち昇る湯気、人の血管の中をはいめぐる液体の繊細な力、心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力……諸君がこの見事さを―」
申し訳ないがこの先の演説は聞いていない。グリーングラスのあの発言よりさらに難解だからだ。でも分からなかったのは僕だけではなく、隣のパーキンソンもポカンとしている。クラップとゴイルは今にもいびきをかき出しそうだ。

そしてスネイプ先生は突然、「ポッター！」と叫んだ。

「アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギを煎じたものを加えると何になるか？」

「分かりません」

スネイプ先生の前で恥をかかないように、と父上が仰っていたので魔法薬学の教科書は一通り暗記しているつもりだ。どうやらグリーンジャーも同じなようで手を挙げています。

「チツ、チツ、チツ―有名なだけではどうにもならんらしい」

先生はグレンジャーを無視する。

「ポッター。ベアゾール石を探せと言われたらどこを探す？」

「分かりません」

先生はグレンジャーを無視する。

「ポッター。モンクスフードとウルフスベーンの違いは何だね？」

「分かりません」

やれやれ、これじゃあアホのポッターのせいで授業にもならないじゃないか。

—そうだ、もしかしてこれは生き残った英雄様にぎゃふんと言わせるいい機会なのでは？

僕は決心して手を挙げた。

「ほお……ドラコ。君がポッターの分からない問題を代わりに答えるのか？」

「はい。全て」

スネイプ先生の目は見開かれた。

「諸君、ドラコが完璧な回答を今からするのでよく聞くように」

何でいらぬプレッシャーをかけるんだ？しかし先生は僕に期待していらつしやるはず。

見てろポッター。

—吠え面かかせてやる！

「まず、アスフォデルとニガヨモギを合わせると、眠り薬になります。これは強力なため『生ける屍』とも言われます。次に、ベアゾール石は山羊の胃から取り出し、たいていの薬の解毒剤となります。最後に、モンクスフードとウルフベーンは同じ植物で、別名をアコナイト。とりかぶとのことですよ」

僕は一気に言い終える。

驚いた表情のポッターが見える。

「正解ですよね？」

「ああ—完璧な回答ありがとう。諸君、何故ノートをとらない？」

羽ペンが滑る音が一斉にする。

どうだポッター！

僕はあいつに吠え面をかかせてやった。きつと心の中でぎやふんと言っているに違いない。

「ポッター、君の無礼な態度でグリフィンドールは一点減点」

一点だけか。できればポッターのせいで十点も二十点も減点してくれればいいのに。

「そしてドラコ、君の回答でグリフィンドールは二点加点」

ちよつと待て。ポッターのせいで僕は一点しか稼いでいないぞ！

パーキンソンは小声で「やったわね、ドラコ」と褒め称えたが、表情は微妙そうだ。それもそのはず、僕達は違う寮なのだ。

その後スネイプ先生の指示でおできを治す薬を調合することになった。実際に薬を作るのは初めてだ。

僕はパーキンソンにアドバイスしながら薬を作る。先生は僕以外の生徒に注意して回っている。どうやら僕には調合の才があるらしい。

しかし、僕とパーキンソンが角ナメクジがを茹で終わる頃、地下牢に緑色の煙、さらには異臭がした。

どうやら間抜けなロングボトムがやらかしたらしい——こぼれた薬は大理石の床をつたい、生徒の靴底に大きな虫食いみたいな穴を作り、たちまち教室は阿鼻叫喚、悲鳴の海に包まれる。僕は条件反射で杖を出し、もはや薬といつていいのか分からない液体を警戒し、椅子の上に乗った。なんとパーキンソンは僕の乗った椅子に強引に乗った。

「パーキンソン！邪魔だ、くつつくな！」

「だつてえ」

潤んだ瞳でこちらを上目遣いに見つめるが、こんなことをしている場合じゃない。一つの椅子に二人は定員オーバーだ。椅子はぐらりと揺れ、バランスを崩す。

——落ちる！

咄嗟に目をつむり、後の惨状を覚悟する。

そして、意を決して目を開けた。

「……………えっ？」

床に広がっていたはずの液体は一掃されていた。
どうということだ？

「すごいわドラコ！魔法を使って皆を助けるなんて！」

「え、……僕が……」

「これをやったのか？」

「だってドラコでしょ？杖を持っているの貴方しかないもの」

「ああ、うん……そうだな……」

生徒達の中で歓声が起きた。スリザリンの生徒もこの時ばかりはパーキンソンに合わせて拍手をしてくれたが、問題は僕がやった覚えがないということだ。

「静かに！」

スネイプ先生は叫んだ。

「大方、大鍋を火から降ろさないうちに、山嵐の針を入れたんだな？」

ロングボトムには顔のそこらにおできが広がっているが、言うほどひどくはないようだ。涙を滲ませながらひたすら先生に謝っている。

「医務室に連れて行きなさい」

やや扱いに困ったような顔でスネイプ先生は他の生徒に命じた。

「……ドラコ、君の冷静な判断にグリフィンドールに三点。今日の授業は終了だ。解散」

生徒達は蜘蛛の子を散らすように教室を出た。

僕は授業終わりに廊下で誰かに背中を叩かれた。

「―痛ッ―」

僕は暴力を振るった奴に杖を構えるよりさきに「すごいぜ、マルフォイ！」という声が聞こえた。

その相手がクラップかゴイルだったら不信感を覚えなかっただろう、その相手はウィーズリーだった。

「悪かったって。杖を向けなくてよ」

「……何の用だ、ウィーズリー」

警戒心剥き出しの僕に目もくれずに、こいつはペラペラ喋り始めた。

「僕さあ、君のことを見直したよ！ハリーのフォローをした上に、全員

おできがでできる危機から救ったんだからね！」

「別に僕は……！」

何もしていない、と言おうとしたがそれをポッターが遮った。

「ありがとう。マルフォイ」

純粹なお礼だ。しかも絶対に仲良く出来ないと思っていたポッターからの。

「それは……まあ……、」

喉が熱い。でもこれは怒りや悔しさの類ではない。

喜びと少しの気恥ずかしさ。

初めての感情。

「同じグリフィンドール生として当然のことを当然のことをしたままでだよ」

ポッターとウィーズリーは二人で顔を見合わせた。

「僕達、君を少し勘違いしていたみたいだよ。お互いにね」

「これからは仲良くしようぜ」

四話 My father!!

僕はその日初めて他の生徒と夕食をとった。

魔法薬学の授業は僕のちよつとした武勇伝だ。瞬く間にその噂は広がり、グリフィンドール生は打って変わり、なかなか好意的に接し、今までのことを素直に謝った。

ロングボトムは僕に何度も礼を言い、腕がもげるんじゃないかと思うほど手を握ってぶんぶん振った。

気分は悪くなかった。

ひよつとしたら、ひよつとすると、僕はグリフィンドールでもやっていけるのでは?とも思った。

「すつかり英雄ね、ミスター・マルフォイ」

グリーングラスはニヤニヤした。

「……別に。僕は英雄じゃないさ」

だってあれは僕がやったことではない。分からないが、僕以外の誰かであることは確かだ。

「気持ち悪いほど頬が緩んでるわよ」

思わず自分の頬を触る。

「ゆ、緩んでなんかいないぞ!」

「―あつ」

「今度は何だ!」

「随分とグリフィンドールで楽しんでいるようだな―ドラコ」

後ろを振り返るとそこには―。

「父上!」

僕が最も愛し、最も尊敬し、最も会いたくない人物だ。

父上はグリーングラスに会釈し、いつの間にかグリーングラスも立ち上がってスカートのエッジをつまんでお辞儀する。

「今晚はグリーングラス嬢、そして hogwarts 生徒諸君。お騒がせしてすまない。だが安心したまえ、急な来校にダブルドアは許可を出した。今日は我が息子―グリフィンドール生のドラコに用があつて来た。……だからそんなに固くならずには食事続けて欲しい」

父上は「グリフィンドール生」を強調して仰った。
スリザリンの生徒以外は父上に恐怖と疑念の目を向けている。
のうのうと食事を続ける者は一人としていない。

「ちちうえ……」

父上は氷よりも冷たい目で僕を一瞥する。

やっとここで居場所が出来たというのに。

僕はやはりスリザリンではなくてはいけないのだろうか？

「ドラコ、お前に話がある。付いてきなさい」

僕は呆然として亡霊のように父上の後に付いた。ゴーストには負けるかもしれない。ああ、僕は何でこんなにくだらなことを考えられるんだ？ 考えろ、父上を納得させるだけの言い訳を。言い訳？ そういえばこの間、グリーングラスが談話室で「言い訳なら考えてあげた」とかなんとか。

どういうことだ、グリーングラス？

父上は一つの手狭な部屋をスネイプ先生から借りた。

部屋はスリザリンの地下の談話室に近く、家具はグリフィンドールとは違い、落ち着いた雰囲気だ。随所に蛇の装飾が施され、意匠が凝らされていることが分かる。

僕は父上と向かい合ってソファアに腰掛ける。

気づいたら紅茶まで出てきた。

「……あの父上、今日は何故ホグワーツに？」

僕は耐えかねず、口火を切った。

「それはお前がよく分かってはいるはずじゃないのか、—ドラコ？」

僕は唾を嚥下する。口が渴いてしようがない。

「組み分けのことですか？」

「それ以外に？」

父上は紅茶を一口啜る。全ての動作に高貴な育ちと気品が滲み出る。流石僕の父上だとますます尊敬の念が高まったが、そんな場合じゃない。

父上はティーカップを置くと語り始めた。

「お前がグリフィンドールだと聞いて、ナルシッサは倒れてしまった

よ」

「母上が!？」

「……心配するな、ただの風邪だ。看病で忙しくここに来るのが遅れてしまった」

僕は心底安堵する。母上のご病気はただの風邪だとはいえ、原因は紛れもなくこの僕だ。グリフィンドールのドラコ・マルフォイだ。

「今年は特にハリー・ポッターの影響で波乱の組み分けになるとは聞いていた。しかしだ、ドラコ。お前がグリフィンドールだとは一言も聞いてはいない」

「……はい」

僕はホグワーツ出発前にあれほど「スリザリンに入るんだ!」と宣言していた。自分の予想と大きく外れる組み分けはホグワーツの歴史上、何度もあったことだと思うが、まさか自分の息子がこうなるとは父上も母上も思ってもみなかっただろう。僕だってスリザリンだと信じて疑わなかった。

父上はふと優しい声で、俯く僕にたずねる。

「何か訳があるのかね?」

言い訳。

—そういうことか。

僕はようやくグリーングラスの言葉の意味を理解した。

この時ばかりはグリーングラスに感謝する。とはいえティースブーン一杯分にも満たない程度ののだがな!

「僕がグリフィンドールを選んだのは、*“穢れた血”*や*“血を裏切る者”*に啓蒙してやるためです。純血の尊さ、—そして力を!僕は純血主義者として蛆のような奴らを教育する使命があります」

僕はとどめにグリーングラスのあの笑みを真似るように嗤った。

「そのために僕はわざわざグリフィンドールを選んだのです」

父上は面白そうにくつくつと笑いをこぼした。

「あの……父上?」

「いや、すまないドラコ。私の親心はどうやらいらぬ心配だったようだな。あのウィーズリーの子供に洗脳されたかと……。とにかくお

前が変わっていなくてよかった」

眉間の皺がいつもの三倍は深く、いかにも厳格そうな父上は表情をやわらげた。よかった、いつもの、普段の父上だ。

「手紙を返せなくてすまない。今回の急な訪問も不安にさせてしまったな」

「そんなことありません父上！」

「そうか。……そういえばグリーングラス嬢もグリフィンドールだったな？きつとドラコと同じ志を持っているのだろう」

「—は、はい」

本当にグリーングラスはそんなことを思っているのだろうか？

たしかにあの時冗談と言っていた。冗談だと言ったのだから本当に冗談なんだろうが、……どういふつもりであんなことを言ったんだ？僕がこうなると知っていながら言ったとすれば……とんでもない奴だ。

「賢そうなお嬢さんだ。〴〵仲良くしてあげなさい」

〴〵仲良くしてあげなさい〴〵。

その言葉は僕の心臓をざわりと素手で触ったような、歪な感触を保持していた。

「父上、母上にお大事にとお伝えください」

「ああ分かった。クリスマスには必ず家に帰りなさい、ドラコ。ナルシッサはお前の帰りを楽しみにしている」

僕はクリスマスの帰省を約束し、父上与別れた。

これでよかったのだろうか？

五話 飛行訓練、そして決闘

父上と面会したあの日からすぐ、僕達一年生を待ち受けていたのは飛行訓練の授業だ。

ごく普通の魔法使いならここで箒を操る術を身に着ける。しかし、僕にとつては至極つまらない授業になるだろう。何故なら僕はすでに箒に乗り、大空を自由に旋回できるのだから。

「……そこで僕はマグルのヘリコプターを避けたんだ。まさに間一髪だったね。全く……意味が分からないね、あんな鉄屑の塊に乗ってられるなんて」

僕は朝食中にその話を聞かせてやった。まあ、脚色が大分施された話だが……。気持ちよく語っているとところにグリーングラスが「ミスター・マルフォイ！私にもその話聞かせてもらえるかしら！」と胡散臭い笑顔でやってこなければ、僕はもつと自慢できたに違いない。

その日の昼下がり。

実に天気はクイティツチ日和の快晴だった。

飛行訓練がスリザリンと合同だということに僕は抗議を申し立てたかったが仕方がない。この学校の教師は無能が多い。犬猿の仲といえよう獅子寮と蛇寮をなにかにつけて合同にさせる。どうせあの狸爺の差し金だ。

僕がスリザリンだったら嬉々としてグリフィンドールをいじめようとしただろう。

もし、僕がスリザリンだったら？

何度も考えたことだ。

正直、あちら側の方が羨ましいことはある。だってクラブもゴイルもここにはいない。

「頑張ろうなドラコ！ヘリコプターを避けたあの技を披露してくれよ」

「だから！背中をバンバン叩くなと何回言わせればいいんだウィーズリー！」

ウィーズリーは僕がヘリコプターを避けたなんて信じてはいない

ようで（実際ヘリコプターなんて避けちやいない）明らかに僕を茶化している。

「……僕、自信ないよ。ロンとドラコならともかく箒なんて乗ったことないし……スリザリンに馬鹿にされるよ……」

「安心しろポッター。みんな口先だけさ」

「……君みたいに？」

「う、うるさい！避けたんだよ！避けたといったら避けたんだッ！」

ここまで言ってしまったら僕も引き下がれない。でもホグワーツの上空にヘリコプターを飛ばすマグルはいないだろう。……多分。

芝生の上には大人しく箒たちが整列している。

見たところ、お世辞にもいい箒とはいえなさそうだ。毛先は整えられていないし、柄がささくれ立っているものもある。これが英国最高峰の教育機関、ホグワーツ魔法魔術学校の箒なのかと疑いたくなるほど劣悪だ。ウィーズリーだってもっとマシンなものを持っているだろう。

だがこんな箒をも乗りこなすのがこの僕ードラコ・マルフォイだ。ヘリコプターを本当に避けてないとはいえ僕の実力は相当なものだと自負している。

「失敗してヘリコプターに体当たりしないでよ、ミスター・マルフォイ」

運動するからだろうか、ご自慢の金髪を一つに束ねたグリーンガラスは言った。

「するか、そんなこと。君こそ箒から振り落とされないように注意するんだな」

「あらマルフォイの癖に言ってくれるじゃない」

男子の平均身長と、僕と、女子としては背の高いグリーングラスでは、当然彼女に僕が見下ろされる形となる。

「ちよつとードラコに近づかないでよ」

そこに割って入ったのはパーキンソンだ。きつ、と彼女を睨むと噛みつくように言った。

「ドラコをグリフィンドールに入れるように仕向けたのって貴方で

しよ！この女狐！」

「ひどいわ、ミス・パーキンソン。……お友達だと思っていたのに女狐呼ばわりするなんて！」

女の友情は脆く、儂なきものなり――。

自分の取り巻きとして気に入っていたパーキンソンも薄情なものだ。しかしグリーングラスの胡散臭さは僕も認めているのでなんとも言えない。

二人の言い合い――もとい喧嘩は白熱した。喧嘩といってもパーキンソンが一方的に罵り、グリーングラスが「ひどいわ！」だの、「そんなつもりはないの！」と芝居がかった声色でこたえていた。明らかにこいつは面白がっていた。

二人の喧嘩はだいぶ大きくなり、他の生徒は野次を飛ばすギャラリ―となり、間に挟まれた僕はひたすら沈黙に専念した。

「何を騒いでいるのです！皆さん減点されたいようですね！」

マダム・フーチが登場したことにより、辺りは一斉に静かになった。パーキンソンも掴みかけた胸ぐらを離す。

白髪を短く切り、鷹のような琥珀色の目を持っている、いかにも厳しそうな教師だ。

「さあ、箒のそばに立って」

みんな言われるがままに箒の横に立った。

「右手を箒の上に突き出してください。そして、『上がれ！』と言う」
みんなが「上がれ！」と叫んだ。

僕は一発で手に収まった。

一発で箒を飛び上がらせた者は少なかった。

僕と遠めの位置にいるグリーングラスに目をやり自慢しようとする、なんと彼女の手の中には箒がある。

グリーングラスの口がパクパク動いた。どうやら何か僕に訴えている。「あ・な・ど・る・な・か・れ・み・す・た・あ・ま・る・ふ・お・い」。つまり「悔るなかれ、ミスター・マルフォイ」。

この野郎……。

あとでグリーングラスを泣かせてやることを僕は決意した。

次にマダム・フーチは箒の端から滑り落ちないように箒に跨る方法をやってみせた。生徒の列を回って、なんと僕の箒の握り方を注意した。

グリーンングラスの方を見ると案の定、彼女はニヤニヤしていた。

本当にいつ見てもムカつく奴だ……。

「私が笛を吹いたら地面を強く蹴ってください。箒はぐらつかないよう押さえ、二メートルぐらい浮上して、それから少し前屈みになってすぐに降りてきてください。笛を吹いたらですよ。一、二の」

三の合図が出る前にロングボトムが飛び出した。どんどん箒は高度を上げ、ロングボトムは真っ青になって悲鳴をあげる。ついにロングボトムは箒に蹴落とされ、そのまま芝生に墜落した。ぽきつと可愛くない音が聞こえたのは気のせいだろうか。

マダム・フーチは即座にロングボトムの元に駆け、手首のあたりを触診した。

「……折れてるわね」

マダム・フーチがそう呟いた。

ロングボトムはつくづく不運な奴だ。

「この子を医務室に連れて行きますから、その間誰も動いてはいけません。さもないと、クディッチの『ク』を言う前にホグワーツを出て行ってもらいますよ」

泣いているロングボトムをかかえて行ってしまった。

二人の姿が見えなくなってから、スリザリンはロングボトムの間抜けさを嘲笑い始めた。

それより僕が気になったのはクラブとゴイルの不審な行動だ。草むらに入り、何やらゴソゴソやり始めた。

しばらくゴソゴソやっている、ビー玉状の何かを見つけていた。あれは……ロングボトムの『思い出し玉』だ。朝、確かに広間で広げていた。

もしかして二人はお菓子か何かだと勘違いしているのかもしれない。いや、二人に限ってありえる。

「クラブ！ゴイル！それは『ドルーブルの風船ガム』とは訳が違う

ぞ。絶対口に入れるな」

「―馬鹿にしてるのか」

硬い拒絶だ。二人は僕を睨んでいる。どういふことだ？二人が僕にこんな口をきくのは初めてだ。

「している訳ないだろう。とにかくそれを僕に渡すんだ」

僕はクラップとゴイルに詰め寄る。

「ハッー、すっかりグリフィンドールの騎士道一色だな！」

「お前のお父上が見たら何と云うだろうな！」

僕は二人の巨体に追い詰められる。

「やめなさいよ二人共！ドラコは正しいことをしているわ！」

「黙れパグ。いつもマルフォイにひつつきやがって……」

僕の前に出てきたパーキンソンはゴイルによって突き飛ばされた。ブルストロードはその元に駆けよって介抱する。流星の僕もこれを見て

「女子を突き飛ばすのはいただけいな、ゴイル」

「……かつこつけやがって」

吐き捨てるようにゴイルは言った。

「ゴイル、そろそろあのことをバラしてもいい頃じゃないか」

「そうだな、クラップ。もう俺達は十分我慢してきた」

「おい待て。いったいあのことって何なんだ」

二人は下卑た薄ら笑いを浮かべたが、僕は何のことかさっぱり分からなかった。

「聞け、グリフィンドールの―」

「待って」

玲瓏な声が響く。人を抑圧できる強い声だ。正体は―グリーン格拉斯だ。

「先生はもうすぐいらっしやるはずよ。こんな時にマルフォイに喧嘩を吹っかけて減点されるのは貴方がたにとって本望じゃないでしよう？」

グリーングラスはせせら笑う「もう少しおつむがいいと思っていたわ」と。

「なんだと！」

「だから取引しましょう。―大人の取引つてやつよ」

二つの寮の生徒はさつきまで小競り合いをしていたにも関わらず、グリーンガラスに注目している。劣勢気味だった僕を助け、話の主導権はすでに彼女が握っている。

「グリフィンドールのドラコ・マルフォイはスリザリンのビンセント・クラップとグレゴリー・ゴイルに決闘を申し込むわ」

「聞いてないぞグリーンガラス！」

僕はグリーンガラスに向かって吠えた。魔法使いの決闘とは勿論、魔法でやりあうのだが、魔法なんてほとんど使えないような二人は僕に殴りかかるに違いない。

「一人じゃ心細い？ならいいわ、私も加勢するから」

クラップとゴイルは今にもその巨体で僕達を張り倒しそうに不満を訴える面持ちだ。

「そんなに恐い顔しないで。か弱い女の子が一人や二人加わったところで貴方がたは困らないでしょう？」

「……介添人は？」

「―ナシ」

もはや僕には止められないほど話は飛躍した。グリフィンドールの生徒も、スリザリンの生徒も歓声をあげたり、口笛を鳴らしたり忙しそうにしている。

「決闘を引き受ける」

「ありがとう。場所はトロフィー室で。時間は……そうね、お月様が空のてっぺんに来たなら」

観客は大きく盛り上がっていた。僕はこの異様な光景に呆気をとられ、火花を静かに散らしあう三人をただただ見守るほかなかった。

……一難去ってまた一難だ。

※

安心してくれ、ロングボトムの『思い出し玉』はあの後ちゃんと返された。故に今回の一番の被害者は誰でもなくこの僕だ。

決闘の噂はたちまち広まり、夕食時には上級生までもがどちらが勝

つかという賭け事に興じていた。

そして、僕は今グリフィンドールの談話室にいる。決闘は数時間後に迫っているが、グリーンングラスに何か素晴らしい考えがあるに違いない。

「ないわよ、そんなの。だから作戦会議をしてるんじゃない」

「お前は……人を混乱に陥れる天才だな……」

僕は呆れて怒る気力もなかった。

「そう、私はジーニアス。だから解決策を思いつかないこともないわ」「ちよつと二人共。本当に決闘なんて馬鹿なことしかすんじゃないでしょうね」

僕達の前に立ちはだかったのは『穢れた血』ことグレンジャーだ。腰に手を当ててまるで学級委員長のように仁王立ちしている。

「私に変身術で稼いだ点をおじゃんにするつもりなの？」

睨みつけるグレンジャーを見て、グリーンングラスはソファアールから立ち上がる。

「いいこと教えてあげる。見つからなかったお咎めはないのよ」

つんつんとグレンジャーの鼻を指でつついた。

「からかっているの!?!」

「からかっているわ」

グレンジャーは真っ赤になって「もう! 私は知りませんよ! 忠告はしたんだから!」とだけ残して自室に帰って行った。

「やるねえ、がみがみハーマイオニーをおちよくるなんて。ところで今日の決闘はよろしく頼むよ、君達にガリオン金貨を賭けてるんだから」

グリーンングラスはウィーズリーとポッターに手を挙げて応える。

「それで? どうするんだ? これに関しては君の責任だ」

「そうね。私も多少なりとも罪悪感を感じているわ。ようはこの勝負、あのことを言わせなきや私達の勝ちよ」

「だから、あのことって何だ?」

「トロフィー室で教えてあげる。――11時。厳守」

「まだ解決策とやらを聞いてないぞ」

グリーングラスは意味深にふふふと笑った。

「それもトロフィー室で。私は少し寝るわ」

スタスタとグリーングラスは自室に戻った。僕は『呪いのかけ方、解き方』という本を取り出して、読むことにした。これでグリーングラスを呪うために。

※

グリーングラスの言う通り、――不本意だが僕は約束を守った。グリーングラスの力なくとも、用意周到なこの僕は『呪いのかけ方、解き方』を熟読したため勝つ自信がある。

「今晚わ、マルフォイ。11時ぴったりよ、おめでとう」

グリーングラスは制服にローブ姿だった。

「おめでどうって言われて嬉しくないのは初めてだ。……それで“あのこと”について教えてくれ」

グリーングラスはすっかり呆れたように長い溜め息をついた。

「本当鈍いのね。でも時間がないからさっさと言うわ。――あのことっていうのは貴方が貴方のお父様と面会した時に言った言葉。数日前の私の言葉を借りたら『言い訳』よ」

「……僕の父上がクラブとゴイルの親に言ったのか」

「多分。貴方のお父様が自慢でもしたんじゃないかしら。それでその話がクラブとゴイルに伝わった、とか。……これがバレたら貴方は困るし、私も面倒だから。うまくやって口止めするわ」

僕はクラブとゴイルが言わんとしていたことと、あの時グリーングラスが僕を庇おうとした理由が分かった。……ん？庇う？いや、待てよ。こいつは僕のことなんて微塵も庇っていないし、むしろ災厄を振り撒けている。

「……騙されるところだった。そうだ、作戦は？勿論君が考えたんだよな？」

「ええ。貴方は何もしくなくていいわ。あー、でも私が指示したら動いて」

グリーングラスが言い終えると、廊下から足音がした。クラブとゴイルだ。二人共、僕の仲間。『元』がつくけれど、それでも僕なり

に面倒をみてていたし、少なからず思い出というものがある。でも二人と僕はもう対岸の者だ。

月明りを受けてカップ、盾、賞杯、像が怪しく輝く。

「……あんまり乱暴なことほしないでくれ」

グリーングラスは頷いた。

「ちゃんと来ていたみたいだな」

「怖じ気づいたかと思っただぜ」

二人はトロフィー室に入ると、グリーングラスは部屋に何やら呪文をかけた。

「おい、何をしたんだ！まさか自分達が有利になるような魔法でもかけたんじゃないよな」

「違うわ。『人避けの呪文』と『防音の呪文』よ。フィルチが嗅ぎつけないようにするためよ」

二人は試しに「わー」とか「おー」とか叫んでみたが、本当に呪文はきいているらしく、たかが一年生の魔法を破ってここに来る教師はいなかった。

「よし。どうする？どちらからだ？」

「私がまず二人を相手するわ」

クラブもゴイルも肝を抜かれたような面持ちだ。しかし顔を見合わせ、ニヤつき始めた。グリーングラスの見た目はか弱い女の子だからだろう。

「確認するけど、杖を取り上げたらそこで終了よ。私は二人の杖を取り上げたなら勝利。二人のどちらかが私の杖を取り上げたら、二人の勝利よ。構わないわね？」

二人は頷く。

グリーングラスとクラブ・ゴイル向き合い、杖を顔の前で構えてから体の向きを反転させ、一步、二歩、三歩と前に進む。クラブとゴイルは互いの足に引つ掛かり躓きそうだった。そして、くるりと両者はまた向き合う。

「コンフリンゴー！」

放ったのはグリーングラスだ。二人の杖は瞬時に爆ぜて木っ端微

塵となり、残った木片はどちらの杖のものなのか判別できない。どうやら爆発呪文のようだ。二人が杖を握っていた手を開くとぱらぱらと新たな木片がカーペットに落ちる。

「よかったわ。ちよつとずれてたら杖じゃなくて手が粉々だったもの」

圧倒的な力の差。十秒もかからず同学年の男子を倒してしまった。僕も知らない呪文だ。恐らく、一年生が習うものじゃない……どこで習った？グリーングラスはやはりただ者ではない。

二人も殴りかかるどころか、戦意喪失している。

「……そんなつもりじゃなかったのよ。貴方がたの杖。でも取り上げたことは取り上げたし、私達の勝ちよねマルフォイ？」

「！……ああ、いや……そうだな」

「二人がミスター・マルフォイと戦うところをぜひ見たかったけど……仕方ないわよね？杖がないんだもの」

グリーングラスがクラップとゴイルのを覗き込む顔はあの『悪魔の笑み』だ。男も背筋を凍らす彼女の十八番の必殺技。

グリーングラスのキラースマイル(本物)は精神的暴力といえよう。追い打ちをかけるようにさらに続ける。

「もし貴方がたが弱い女の子に決闘で負けて、さらに杖を破壊されたなんて知られたらさぞご両親はお嘆きになるでしょうね」

「ご……ごめんなさ……」

鬼も尻込みするような舌峰だ。二人の瞳には薄い水の膜が張っている。

「やめて頂戴。別に私は泣かせてないわ、勝手に泣いたのは貴方がたよ。そうよねミスター・マルフォイ？」

「まあ……そうだな」

―嘘つけ！

二人はたちまちたちまち泣き出した。まるで赤子のように『防音の呪文』が非常に役立ったと思う。

「―グリーングラス！」

「……今片づけるから。あのーお二人共、その杖をなんとかできない

「こともないわ」

「ほ、本当！」

二人の顔は輝く。

「しかし。私だってタダで直してあげられないわ。それ相応の対価がなきゃね」

「……ここで口止めか」

「そう、マルフォイの言った通りよ。ミスター・クラブにミスター・ゴイル、あのことを黙って欲しいの。……意味は分かるわよね」

二人は無言でふるふる震えながら頷く。生まれたての小鹿のような二人を前にグリーングラスは何やら呪文を唱え、杖を振る。

「結構。じゃ、直してあげる。ーレパロ」

グリーングラスが杖を一振りすると、二人の杖はみるみるうちに修復された。

「返してあげるわ。でも言ったらどうなるかお分かりよね。今度は貴方がたが私の魔法で粉碎されることになるから。ではおやすみなさい。よい夢を」

そう言うやいなや、部屋にかかっていた呪文を解除し、互いの寝床に帰ろうとして僕達はトロフィー室を出た。恐らくいい夢はみられないだろう。

「おい。修復呪文の前の魔法はなんなんだ？」

「約束を破ったら死ぬ魔法」

グリーングラスはケロツと答え、僕は愕然として声すら出なかった。

「嘘よ。あれはデタラメ。でもまあすれば怖がって言えなくなるでしょう」

きつとこいつは将来ペテン師にでもなれるだろう。

「それは名案だな」

六話 逃走

—しかし。そう簡単には終わらなかった。

「わ、私は悪くないんだから！私はハリーとロンを止めに来ただけなんだから！だから—だから私は悪くないんだから」

そこにいたのはグレンジャー。そしてポッターとウィーズリー。

「おい、馬鹿なのか？君たちは？」

「まあ……その、ゴメン。君達の決闘が気になってさ」

とはいえ、深夜の決闘の観戦のために寝床を抜け出す馬鹿がいるとは。僕らも大概だが。

「どこに隠れてるんだ、夜中にベッドを抜け出した生徒は？……ミセス・ノリス、すっかり嗅ぐんだ……」

それはフィルチの声だった。僕達の顔色は暗闇で見えないが、想像に容易い。

聞こえるやいなや、僕達は足音を立てずに、でもがむしやらにフィルチと反対方向のドアに急いだ。それはもう極東のニンジャ顔負けに。

しばらく走るとトロフィー室のドアが閉まる音がした。とりあえず巻くことには成功した。

「もう！だから嫌なのよ、—こんな危険なことは二度としないで！」

「もう！だから嫌なのよ、—こんな危険なことは二度としないで！」

現れたのはポルターガイストのピーブスだ。奴はグレンジャーの台詞を誇張しながら復唱した。入学式の後には監督生から説明された通り、コイツはかなり厄介だ。

「ダメだねえ、こんなところに一年生のおチビちゃん。さあさあ、どうなる？」

僕は歯ぎしりする。

—面倒になった。

ポッターとウィーズリーはあろうことかゴーストよりも下等な奴に懇願し始めた。

「お願いだ、ピーブス！僕達、退学になっちゃう」

「うーん、ど・う・し・よ・う・か・な」

困り果てる僕達を見下ろし、ピーブスはニマニマした。ポルターガイストの癖して加虐趣味を持っているのはいただけなかった。

「どけ、ピーブス。僕達はベッドに戻る」

それがいけなかったのか。僕はすぐに後悔することになった。

「生徒がベッドから抜け出したぞ！」

ピーブスは大声で叫ぶ。

僕らは一目散に逃げ出した。後ろからフィルチのような足音が聞こえるのは気のせいか。

無我夢中に走る。走る。

しかし僕達は扉にぶち当たった。鍵がかかっており、どうすることも出来ない。

「マルフォイ。何とかしてよ。魔法薬学の授業みたいにさあ！」

「急に頼まれても！そ、それにあれは——」

僕がやったわけじゃない。そう言おうとしたが、グレンジャーがポッターの杖をひったくり、鍵解除の呪文を唱えた。

五人は部屋に雪崩れ込んだ。

「ようやく巻けたみたいね」

「……そうだな。問題はいつここを出るかだ。フィルチがまた来ないといいが」

「なんならここで一夜を明かすという手もあるけど」

「馬鹿言え。僕はベッドの上以外では寝ない主義だ」

「二人共！」

グリーングラスと話しているとポッターの声が耳に入った。

「後ろ！あれを見て！」

僕は言われた通りに振り返る。

そこにいたのは三頭犬—ケルベロスだ。

まるで怪物そのものだった。六つの琥珀の目は血走り、獲物の僕らをしつかりと見据えている。三つの鼻はそれぞれの方向にヒクヒク動き、肉の匂いを確かめているようだった。恐ろしいのは、口から覗く、何故か血濡れている牙とだらしなく垂らした涎。いったい何人の

人間を食らったのは想像もしたくない。

「馬鹿言え……」

僕は思わずそう漏らす。

ここは部屋ではなく『禁じられた廊下』だった。

僕はまだ死にたくない。

言葉を交わさずとも僕達はただ「死にたくない」という思いで一種の団結というものをした。

急いでドアを開け、ケルベロスが出た来れないように丁重に閉めてから、ニンバス2000にも劣らぬ速さでさっきの廊下を五人で駆ける。

ようやく息も絶え絶えになりながら、七階の太った婦人の前までたどり着いた。

「まあ……貴方達。いったい何をしていたの？」

僕達はまるで怪獣犬と戦ったかのように汗だくで、顔も林檎のように真っ赤だ。

「何でもないよ。――豚の鼻、豚の鼻」

ポッターが言う肖像画は開いた。

僕達は談話室のひじ掛け椅子やソファアーに座り、しばし沈黙する。当然だ、あんな恐ろしい光景を見てしまったのだから。僕でさえ足が震えた。

「馬鹿じゃないのか……怪物を城の中に閉じ込めるなんて……。父上に言いつけてやる」

「貴方のお父様に言いつけてもどうにもならないわ。ダンブルドアは何か考えがあるだろうし、理事のお父様もきつとご承知よ」

グレンジャーにばっさりと斬られ、僕は憤慨しそうになる。

「それよりあの三頭犬は仕掛け扉の前に立っていたの。きつと何かを守っているに違いないわ」

「へえ、さすが秀才グレンジャー。で？何を守っているかの見当はついているのかい？」

僕はグレンジャーを皮肉った。

「……そこまでは分からないわ」

「なあんだ。秀才グレンジャーも大したことないじゃないか。だからお前は―」

「ミス・グレンジャー!」

僕の言葉を遮り、グリーンングラスは叫んだ。

「もう寝ましよう。同じ部屋よね?では皆様、お休みなさい」

グリーンングラスはグレンジャーに付き添って、女子の寝室に消えてった。

「やめた方がいいぜ。ハーマイオニーをおちよくるの。アイツ、いつも本気にするんだから」

「ああ……気を付けるさ。出来たら、ね」

僕達もまもなくしてそれぞれの寝室に戻った。

※

あれから数日が過ぎた。僕達の冒険は僕達しか知らず、お咎めはなかった。

しかし、可哀そうなのはクラブとゴイルだ。フィルチはピーブスが言った生徒というのはどうやら二人のことだと思い、誤って捕まえてしまったらしい。あながち間違いではないというのは確かだ。そのせいでスリザリンは終始険悪な雰囲気で、合同授業があった日には噛み殺す勢いで睨まれ続けた。ポッターとウィーズリーは調子に乗ったが、僕としては微妙な気分だ。

グレンジャーはあれから僕はおろか、ポッターやウィーズリーに近づかなくなった。あの知ったかぶり屋をまともに相手してあげているのは二人ぐらいだったので、グレンジャーは段々孤立していたが、当の本人はどこ吹く風だ。

そしてある朝。なんとポッターにかのニンバス2000という競技用箒が届いたのだった。どうやら彼は飛行訓練での飛びっぷりでマクゴナガルからクイディッチチームのスカウトを受けたらしい。厳格な教師だがさすがのここ数年、スリザリンにクイディッチの賞杯を持っていかれるのが我慢ならないとか。そこで教頭の権限を使い、特別措置のターンだ。

正直言うと……悔しいし妬ましい。真っ黒なでドロドロしたもの

が心の中で煮えている。僕は運が悪かったただけだと言いつつ、飛行訓練の授業の度に思い知らされる差。

努力とは全く異なるそれは才能。

僕の方がずっと前から箒を乗りこなしてきたのに。

僕の方が……僕の方が……と、考えたが、自己嫌悪に苛まれるだけだ。

スリザリンなら何か変わっていたのだろうか。

それはもう……考えたくない。

七話 弱虫ヒーロー

ホグワーツに入学して早くも2ヶ月。今日はハロウィーンだ。学校中の誰もが浮足立ち、城中はかぼちやの香りに包まれる。

本日目玉の授業はフリットウィックの妖精の魔法だ。やつとものを飛ばす練習が出来るので生徒の機嫌も上々だ。先生は生徒を二人ずつ組ませてから授業を始めた。

僕のペアはグリーングラスだ。彼女の成績は常に真ん中あたりだ、その上僕は彼女が宿題以外の勉強をこなしているのを見たことがない。机に齧り付き、もはや机と一体化しそうなグレンジャーなら別だが、奴は相当な天才に違いない。

先生に言われた通りの呪文と杖の振り方を実践するが、中々一筋縄ではないかない。この僕でさえ簡単に成功できなかった。

しかし問題は僕達ではなくウィーズリーとグレンジャーだ。

グレンジャーがウィーズリーのお手本として羽を飛ばすと、先生は彼女を褒め称え、グリフィンドールは5点加点された。自分の素晴らしさをアピールされ、成功しないウィーズリーはさぞ悔しかっただろう。

「さすがミス・グレンジャーね。たった一回で飛ばせるなんて」

「フン、大したことないさ。僕だって本気を出せばこのくらいなんてことない」

「なら見てみたいものね、貴方が本気を出すところ」

「なっ……！お、お前だって成功してないじゃないか！」

グリーングラスはクスクスと笑った。

「じゃあ頑張りましょう。二人でやればなんとかならないことはないわ」

僕は驚いた。グリーングラスがこんな物言いが出来るとは。

「何よ。別に変なこと言ってないわ」

「お前がこんなこと言うなんて変だろ……」

「失礼しちゃうわ」

つんとそっぽをむいたグリーングラスと僕はひたすら呪文の練習

を続け、ようやく成功できた。

授業が終わって、全員が解散するとポッターとウィーズリーにそれとなく合流した。ケルベロスを見たあの日から少し距離が近くなった気がする。

「本当に最悪だよ、今日の授業。全く悪夢みたいな奴さ」

「当たり前じゃないか。グレンジャーは穢れた血だ」

その時、世界が静止したように思えた。空気も、時も、なにもかも引きつった笑顔のままウィーズリーは言った。

「穢れた血は……言い過ぎじゃない？」

「本当のことじゃないか。もしかしてウィーズリー、君はアイツを庇うっていうのかい？」

「庇うわけじゃないけど。マルフォイはやっぱり純血主義なんだなつて」

僕は理解した。ウィーズリーは確かに純血だ。でも「血を裏切る者」だ。根本的に僕と考えが違う人間だ。本来だったら関わるはずのない人種だ。

本当は対岸の人間だ。

「その何が悪いんだ。君はアイツが嫌いだ、僕はマグルが嫌いだ。それに何の違いがあるんだ、ウィーズリー？」

ウィーズリーが僕に失望しているのは見て分かった。

「もういい。分かったよ」

その言葉が何を意味しているのか分かった。

当然だ、最初から分かっていたことだ。

『僕と君は友達になれない』

ウィーズリーはポッターを連れて、行ってしまった。

悲しむ必要は何もない。

※

全ての授業が終了し、晚餐の席に着く。さすがホグワーツのハロウィーンだ、食卓に並ぶのはかぼちゃパイにかぼちゃのポターージュスープ、かぼちゃサラダ、かぼちゃグラタン、かぼちゃプリン。中にはニホンから伝わったかぼちゃのテンプラとかいうものもある。

舌鼓を打っていると、頭のずれたターバンを支えながら、闇の魔術に対する防衛術のクイレルが青い顔で広間にやってきた。

「ち、地下室にトロールが……！」

それだけ言い残すと、ボタンと気絶して倒れてしまった。

和やかだった広間中に恐怖と当惑が伝染する。ざわめきだした生徒達を静かにするため、ダンブルドアは紫の爆竹を杖先からいくらか放った。

「監督生よ。速やかに自分の寮の生徒を引率して談話室にもどるのじゃ」

トロールが学校に侵入するなんてやっぱりホグワーツはどうかしている。生徒にもしものことがあったらどうやって教師は責任をとるんだ。

「……マグルが消えるなら別の話だがな」

僕は一人で呟いた。

すると僕の元に駆けつけてきたのは――ポッターとウィーズリー。

「な、何の用だ！」

切羽詰まりながらウィーズリーが言った。

「決まってるだろ！女子トイレに行くんだよ、三人で！」

「……え。はあああああ！いい、行きたいなら二人で行け！僕にはそ、そんな趣味はないからな！」

「ロン！違うだろ、ちゃんと説明しなきゃ」

僕は不良学生ではない。さらには女子トイレを覗く破廉恥な趣味はない。この混乱に紛れてこんなことをしようとするなんて言語道断だ。

「ハーマイオニーが僕達の悪口を聞いていたみたで女子トイレに一人なんだ。僕らは助けに行くけど、君も勿論来るよね」

ポッターは早口でまくし立てた。一応、最後の文は疑問形だが強制を意味しているのは分かった。しかし僕が危険を侵す必要はない。

「僕にマグルを助けてやる義理なんてないね」

「――マルフォイ！」

「もう分かっただろハリー！早く行こう！」

「……うん」

ポッターとウィーズリーは走ってハツフルパフの波にもまれながら進んだ。僕は少し遅れてしまった列を取り戻すべく足を急がせた。

「あら弱虫さん。結局行かなかったのかしら」

僕の隣に並んだのはグリーン格拉斯だ。僕達の話盗み聞きしていたらしい。僕は何故か神出鬼没の彼女の特性を恨んだ。

「勝手に聞くな、失礼な奴め。それと僕は弱虫じゃない」

「それは失礼したわ。失礼ついでに一つ言うけど……そのままだと友達なくすわよ」

本当に失礼な奴だ。

しかし構わずにグリーン格拉斯は続けた。

「現にスリザリンを半分敵にまわしているようなものだし。グリフィンドールだって別に貴方のことを完全に信用なんてわよ」

「だから僕に危険を侵せと？冗談じゃない、僕は行かないからな」

グリーングラスは溜め息をついた。

「強情かしら。でも貴方が言うことも確かに一理あるわ。まあ好きになさい、せつかく仲直りのチャンスだったけど」

列は段々グリフィンドールの談話室のある尖塔に近づいていく。危ないことは他の誰かにやらせればいい。例えば英雄・ポッターとか、その腰巾着のウィーズリーとか。

仲直り？僕はアイツらのことなんて何も思っちゃいない。だから僕は行く必要はない。

最初から友達になることを望めない人種だから。

その時、僕の脳裏にグリーングラスの「弱虫」という言葉が響いた。『あら弱虫さん。結局行かなかったのかしら』

僕は、違う。弱虫じゃない。

僕が行くのはこれをアイツに、グリーングラスに証明するためだ。断じてグレンジジャーを助けるとか腑抜けた理由じゃない。

僕の強さを見せつけるためだ。

どちらが腰抜けか教えてやる。

それにトロールは馬鹿だ。なんとかなる。

……多分。

僕の足はじりじりと後退する。背を向けたグリーングラスもロブの黒に埋もれて見えなくなる。

「僕は弱虫なんかじゃない」

僕は人を押し、人に押され、反対方向に向かった。ウィーズリーの兄弟の監督生が「待つんだ、一年生！」とか言う声が遠くで聞こえた。どれくらい走っただろう、僕が肩で息する頃には例の女子トイレの前だった。

一足先に辿り着いたポッターとウィーズリーの小さな後ろ姿が見える。

ん？待てよ、僕は『女子トイレ』に入らなくちゃならないじゃないか！

いや、当たり前だけど思わぬ難所だ。母上に「マルフォイ家たるもの常に紳士であること」と教えられているのに。しかしここで戻ったらそれこそグリーングラスに鼻で笑われるのが目に見える。

「……母上、申し訳ありません」

僕はそう呟き、女子トイレに踏み込んだ。

「……うッ」

……ひどい臭いだ。言葉で表わしたがいほどの悪臭だ。薬草学の温室のあの独特の臭いの方がまだ可愛げがある。

僕はローブから杖を引き抜き、警戒しながら恐る恐る奥へ進む。馬鹿のトロールのことだから不意打ちなんて出来ないだろうが、誤って潰されたら危ない。恐々させた足が疲れて震える。勿論恐怖に打ち震えているわけじゃない。そんなのマグルだけで結構だ。

ようやく奴の姿が見えた。一番奥の小窓から漏れる月明りに照らされた四メートル級の巨体。墓石色の肌はすでに誰かを吊っているように思える。それに岩肌のような。顔は間抜けそうだ。

「なあんだ。……大したことないじゃないか。ただのデカぶつき。何も怖がることなんて……は、ははは……」

僕は思わず後ずさる。トロールは僕を見つけたようで、ノツシノツシとゆっくりこちらに近づく。

「ぼ、僕は何もしてない……。そう、何も！だから馬鹿なことはやめて……大人しくした方が君のためだ」

トロールは僕の顔を舐めるように覗き込む。

「はははは、は、ははは……」

視界が雨が降っているようにぼやける。別にこれは涙じゃない。汗だ。戦った勲章の汗だ。

「マルフォイ！今からハーマイオニーを個室から出す！引き付けろ！」

「な、何だポッター。引き付けるって……」

「早くしてよ！」

僕はその場に座り込んだ。こんなのに挑むなんて無謀だ、馬鹿のやることだ。そう、僕のような理性的な魔法使いがやることではない。

――助けて母上！

「やーいウスノロー！こっち向けよ、この間抜けめ！」

僕の前に来たのは母上ではなくウィーズリーだった。罵倒されたのに気づいたトロールは醜い顔をさらに醜く歪めて怒っている。ウィーズリーは落ちていた金属パイプを投げつけたが奴は何も感じない。

「早く、走れ、走るんだ！」

ポッターはグレンジジャーに向かって叫んだ。ドアの方へと引つ張ったが、グレンジジャーは恐怖でメドゥーサに見つめられたように固まり、壁にびったりと張り付いたままだ。先ほどのポッターの叫び声によりトロールは逆上してこちらに向かってきた。

……え？こちらって……。

「来るぞマルフォイ！ほら立てよ」

僕はウィーズリーの手を借りてぼんやりと立ち上がる。

その時、ポッターはトロールに飛びつき、首に腕を回してまどわりついた。……何をやっているんだポッター。そんなことをやってもトロールは当然分るはずがないが、ポッターの杖が鼻のあたりをぐいぐいと突き刺す。そしてついに鼻の穴にお見舞いしてやった。

「いいぞハリー！」

ウィーズリーは叫ぶ。トロールは痛みにも呻き声をあげながら、持っている棍棒をやたらめったら振り回す。ポッターは揺れる巨体に必死にしがみつく。しかしトロールも負けじと棍棒でポッターに一撃をくらわそうと奮闘する。

「どうしようマルフォイ。……ハリーが！」

「分かってる！」

僕は握りつぱなしの杖をトロールに向けた。まるで北極にでもいるみたいに体がガタガタする。

「どうしようウィーズリー」

「何！」

「……呪文が思いつかない」

暴れるトロールを前に僕は冷や汗をかきながら言った。

「そんなの何でもいいよ！早くコイツを！」

ポッターの悲痛な声にウィーズリーはこたえるように杖を取り出す。

「どうしよう。何か、呪文だ。ここで役立ちそうな……。」

「ええい、もう何でもいい！どうにでもなれ！」

「ウインガーディウムレビオサー！」

何たる偶然、そう叫んだのはウィーズリーと同時だった。

トロールが持っていた棍棒は右手から離されて、空中を舞う。そして一回転すると、トロールの頭に鈍い音が響いた。トロールはフラフラとよろけるとその場でうつぶせになった。

四人は今起こったこの惨状ともいえる光景をひたすら眺めた。

「これ……死んだの？」

だんまりのグレンジャーがようやく口を開いた。

「いや、ノックアウトされただけだと思う」

ポッターはトロールの鼻のあなから杖を引き抜いた。先端には灰色の塊――つまり鼻糞がついている。見るに堪えないものだ。

「ウエー。トロールの鼻糞だ」

ポッターは鼻糞がついた杖をこちらに向けた。

「こつちに向けるなポッター」

「ハリー！その鼻糞、マルフォイにも味合わせてやれよ」

「は……何を言ってる……。や、やめろ！つけるんじや……！あー！」

ポッターの魔の手により僕のローブにはべったりと汚物がついた。しばらく四人の鼻糞つけ合い合戦というとてもくだらない戦いが繰り広げられた。まもなくして四人は鼻糞だらけの姿になったのだ。

「貴方達！一体全体何をやっているのですか!？」

僕達の惨状―そしてトロールが倒れている惨状にマクゴナガルは言った。僕らの顔面は一瞬にして蒼白になる。マクゴナガルの後ろにはダンブルドア以外の他の教師陣が控えている。「あもう、先生達は何でここに……」

ウィーズリーはおずおずとたずねる。

「監督生から連絡がきました。ミスター・マルフォイが避難列から抜けたという」

マクゴナガルはじっと僕を見つめた怒気を含んだ目を。

「貴方には失望しました。こんなは無謀なことをするなんて思いもしませんでした」

「マクゴナガル先生！聞いてください―三人は私を探しにきたんです」

グレンジャーが叫ぶ。そして息を吸い込んで言った。

「私、トロールをやっつけにきたんです。トロールのことは本でよく知っていたので……一人でできると思いましたが」

マクゴナガルは「まあ」と声をあげ、グレンジャーの真っ赤な嘘に教師はざわめきだした。勿論先生は嘘だなんて微塵もおもってないだろうが。

「もし三人が私を見つけてくれなければ、きっと今頃死んでました。ハリーはトロールの鼻の穴に杖をさし、ロンとマルフォイがトロールの棍棒でノックアウトしました。本当に三人が来てくれなかったら、私は……」

僕達は顔を見合わせた。マクゴナガルがこちらに視線をやったので「全くその通りです」と激しく頷いた。グレンジャーがこの世界で一番嫌いなことは規則を破ることだ。彼女がそんなことをするなん

て、天変地異もいいところだし、クイレルがフローラルな香りを放つほどにありえないことだ。

「ミス・グレンジャー、愚かしいことです。たった一人で野生のトロールを捕まえようとするなんて。グリフィンドールは五点減点です。――しかし」

しかしの後が気になる。僕達はその言葉の続きを息をのんで待った。

「二年生でトロールと対決できるなんてそうそういません。一人につき五点ずつ差し上げましょう。先ほどのパーティーの続きが寮で行われています。さあ、ローブを綺麗にしてから早くいつてらっしゃい」

母親のような慈しみの笑みを浮かべ、マクゴナガルは他の教師を引き連れて去って行った。

行ってしまった途端、忘れかけていた疲れがどつとでた。僕はローブがトロールの鼻糞まみれになっていることに気づいた。談話室に戻ったらグリーングラスになんとかしてもらおう。

僕達はぐったりしたまま、寮のある尖塔に向かった。

「ありがとう」

突然、ぽつりとグレンジャーが呟いた。

「嬉しかったわ、その……助けに来てくれて」

ぼそぼそと力なく言うグレンジャーはいつものような自信満々な姿とは打って変わっている。

「当ったり前だよ！クラスメイトだろ!?!」

「ロン、その前に言うことがあるだろ?」

ポッターがいさなめるとウィーズリーは決心したように言った。

「えーと……。授業の時は僕が悪かったよ、ごめん」

言い終えると、ポッターとウィーズリーは僕の方を見た。

「な、何だよ」

「ハーマイオニーに言うことがあるんじゃない?」

ポッターはニヤニヤと笑った。

「僕は……別に」

「マルフォイ！」

ポッターとウィーズリーは声を荒げた。

「……すまなかつたな」

僕は素直にその言葉を口にした。四人で戦ったからといって、謝罪したからといって、純血主義の思想が抜けたかときかれれば違う。僕はこの血の繁栄と安寧に生涯を捧げると決めている。

「声が小さすぎて聞こえないよ、ドラコ坊ちゃん」

「……殺されたいなら素直にそう言えウィーズリー」

「もうーいいわ。気にしてないもの。……それよりご飯を食べましょ、この四人で」

グレンジャーの提案に頷きあい、僕達は走って談話室まで向かった。すっかり疲れは忘れていた。

僕は純血主義だ、それは変わらないことだ。

ーでも。

友達がいること。それが何の罪になろうか。